

各地で話題の病虫害

メロン黒点根腐病

学名: *Monosporascus cannonballus*
Pollack et Uecker

近年、各地のメロン栽培地域で、果実の収穫間際に株が激しく萎凋するメロン黒点根腐病が発生して問題になっている。

病原菌は糸状菌の一種で子のう菌類に属し、1970年に米国アリゾナ州でメロンの根から初めて分離され、新種として記載された。

わが国では1979年に山形県でメロンの根から初



千葉県暖地園芸試験場 植松清次氏提供

めて発見され、1983年には千葉県暖地園芸試験場によってメロンを萎凋させる病原菌であることが明らかにされた。病徴は果実が肥大し、ネット形成がほぼ完了したところから急激に萎れるのが特徴で、はじめの数日間は夜になると回復するが、病勢が進行すると萎れは回復しなくなり、葉は黄化し株全体が枯死する。根は全体が水浸状に褐変し、細根は消失して、褐変部に小黑点の子のう殻を生じる。本病は土壌伝染性で、土壌温度が25～30℃で多発する。

防除対策としては、ウリ科作物の連作を避け、クローリング剤などの土壌くん蒸剤による防除が効果的である。

シソの斑点病 (新称)

学名: *Corynespora cassiicola* Wei
英名: *Corynespora leaf spot*

平成2年に大分県と大阪府の施設栽培中のシソ(青しそ)で、新葉に直径1～2mmの褐色小斑点を生じる病害が発生して、品質の低下が問題になった。本病は、大分県農業技術センターと大阪府農林技術センターの調査によって、*Corynespora cassiicola* によって起こる新病害であることが同時に明らかになった。



大分県農業技術センター 狭間渉氏提供

病原菌は糸状菌の一種で、不完全菌類に属し、ナス、キュウリ、ダイズ、ササゲ、ゴマなどに斑点性の病害を起こす菌として知られている。

病徴は、はじめ上位の新展開葉に不明瞭な褐色～淡褐色の小斑点として現れ、のちに拡大することなく直径1～2mmの周辺の明瞭な褐色小斑点となる。未展開葉では葉縁の褐変と葉の湾曲を生じ、展開した上位葉の葉柄や葉脈部分に紡錘型、大きさ1～2mmで褐色の小条斑を生じる。

下位葉では暗褐色で5～10mmの病斑を生じ、時には同心輪紋状の大型病斑が現われることもある。

なお、本病の生態解明及び防除対策については今後の研究が待たれる。

イチイカタカイガラムシ(仮称)

学名: *Parthenolecanium pomeranicum* (Kawecki)

英名: yew scale

昭和63年頃から、北海道帯広市内の公園や道路沿に植えられているイチイ(オンコ)にカイガラムシの一種が発生して問題になっている。

本虫は東京農業大学の河合省三氏の同定によると本邦未記録の *Parthenolecanium pomeranicum* (仮称: イチイカタカイガラムシ) であることが判明した。これまでに知られている寄主植物はイチイだけで、外国での分布地域はヨーロッパと北アフリカの一部である。



横浜植物防疫所

成熟雌の体長は3.8~5.0mmで、体色は光沢のある暗褐色で、体型は半球形で頭部と尾部がわずかに細くなっている。未成熟雌は縦長の半球形、体色は透明または黄色で前体部に3本の赤い横縞が発達している。

発生は年1回で2齢幼虫で越冬する。越冬した幼虫は6月頃には成熟し、雌雄現れるが単為生殖で産卵する。7月にふ化し、1齢幼虫は葉に定着して吸汁をはじめ、9月頃に2齢幼虫となり、枝に移動する。本虫の被害は吸汁により樹勢が衰え、ひどくなると枝が枯死することがある。また排泄汁によってスス病が発生する。

防除対策としては、被害枝を剪定して、風通しを良くすることが大切である。

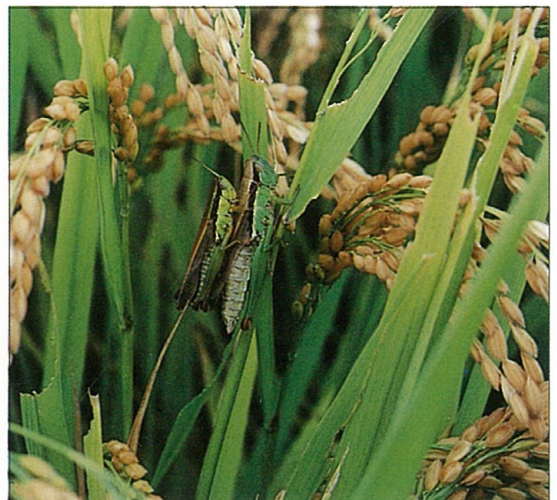
コバネイナゴ

学名: *Oxya yezoensis* Shiraki

英名: rice grasshopper

戦後に普及した有機塩素系殺虫剤の散布によりイナゴ類の発生による稲作への影響はほとんどなかったが、最近、東北をはじめ関東、北陸地方の各地でコバネイナゴの発生が増加し問題になっている。例えば、青森県では昭和62年の発生面積は水田面積の1%(838ha)であったが、平成2年には45%(30,637ha)、平成3年には62%(41,928ha)と県全域に広がっている。

本種の発生は年1回で、土中に産下された卵塊



青森県津軽地域病害虫防除所 室谷喜美雄氏提供

で越冬し、6月上旬から7月中旬にふ化する。

体長は雄が30mm、雌は40mm、体色は黄緑色で前胸背基部に幅広い黒帯があり、翅は腹端よりやや短い。被害は稲の食害による減収のほか、機械刈取り時に虫体が吸い込まれ、穀の中に異物として混入することによる品質の低下がある。

防除法としては、発生密度が高いと予想される場合は7月頃のふ化終了期に幼虫の多い水田周辺の雑草地や畦畔にピリダフェンチオン粉剤などの殺虫剤を散布し、出穂直前から穂揃い期にピリダフェンチオン・BPMC粉剤などの散布によるウンカ類との同時防除が有効である。本虫は移動、分散が激しいので広域一斉防除を実施することが重要である。